トリプタン製剤

確か、何度か薬の使い方を教えたはずだ。が、この人。いつの間にか自己流になっている。アブナイ。肝が冷える。

45歳のS子さん。若い頃からの頭痛持ちだ。まずは、視界の右側半分にギザギザとしたものが見え始め、20～30分続く。次いで、ズキンズキンとした頭痛が起きてくる。体を動かすと強くなり、寝込んでしまう。ひどい頭痛で、吐いたりする。閃輝暗点を前兆とする片頭痛である。

そのS子さん。「この頃、薬が効きにくい」と言う。で、いつ薬を飲んでいるか聞いてびっくり。「ギザギザの閃輝暗点が始まってから、頭痛が始まる前にトリプタン製剤をのむ」と、ケロッとして言うではないか。ワッシーは腰を抜かさんばかりに驚いた。

閃輝暗点というのは、後頭葉という視覚の中枢へ血液を送る血管が縮んで血流不足なったために起きる。その後逆に、脳血管が拡張し、周りにある神経が刺激されて痛みが起きるのだ。トリプタン製剤というのは、拡張した血管を縮めるようにして痛みを軽くするものである。というのに、S子さんは、血管を縮める薬を血管が縮んでいる時に使っていたことになる。

もともと、血管を縮める作用があるトリプタン製剤は、脳梗塞や狭心症などの血行が悪くなる血管障害があるひとには使ってはいけないことになっている。へたをすれば、脳梗塞や心筋梗塞に引き金になる。しかし、S子さんの気持ちも分からないわけではない。ひどい頭痛で寝込む。だから、予防的に薬をのんでおこう、と思う。誰でもやりそうだ。

ま、長く診ている患者さんとの間には、いつの間にか、根拠のない信頼感ができてくるのかも。で、「常に緊張感が必要だ」と気張ってみたら、「センセ。今日は、ちょっとヘン」と言われてしまった。

（石黒修三＝いしぐろクリニック・脳神経外科医：8/22北國新聞掲載）